

若

手教員の研修が不十分だから、先輩から学ぶ機会を作ってはどうか。職員からのものもとてもな提言だったので諸手を挙げて賛成したら、「先生もやってください」と切り返されてしまった。ずっと先であつたはずの順番も、日を送るうちに近づいてきて、さて何を話したものかと考えた。

いくら学ぶと言つても、訓示みたいになつたら聞き手も嫌だろうし、そもそもぼくがまつぴらなので、自分の教員なりたてのころの話をすることにした。

二年目の春先ごろだつたか、ある講演会に参加した。奈良県の小学校教師中山先生が「子どもの心が開くということ」というテーマで語つた。その後四十年近く、数多官製の研修を受けてきたが、この友人のプライベートな企画を超えるものは一つもなかつた。

話は、担任した子どもたちが日々綴つていた詩についてだつた。演題の通り、それは教師に向かつて開かれた心の記録。中山先生の方法はただ一つ、子どもと同じだけ赤ペンで書いて返す、というものだつた。

話を聴いた翌日、ぼくは子どもたちに宣言した。「今日から君たちが書いたのと同じだけ日記に返事を書く。」

子どもたちの日記は、みるみる変わつていった。ぼくは、子どもたちの表現に夢中になつた。その後も担

任になつたときは、多少の変化は試みたものの、基本は変えなかつた。子どもたちの言葉に生かされてきたのだと改めて思う。

そんなことをつらつらとしやべつて、もう四十年近くも前の昭和の子どもたちの日記を読んだ。話の終わりに、昨夏届いた当時の子ども、今はもう四十代の母親からの手紙を読んだ。ちよつとしたきつかけがあつて、何度か手紙のやりとりをする事になったのである。それこそ四十年ぶりに。

「先生、早速のお返事ありがとうございます。あまりの早さにとつても驚くと同時にとつてもうれしかったです。

先生の字、変わらないですね。いつも赤で返事もらつていたので青は新鮮でした(笑)。(中略)

先生の返事を読んでいた私を見て、娘が「何枚返事来たの?」と聞くので「四枚だよ」と答えると「母さん四枚も手紙書いたんだ」と言うので「何で?」と聞くと「だつて同じだけ返事をくれる先生なんですよ」と言つたので驚きました。(笑)」

この手紙を受け取つたとき、ぼくはこのくんだりを笑つて読んだ。同じように笑うはずだつたのに、教員たちの前で読んでいたら、なぜだか胸が詰まつてしまったのだつた。

夕焼け通信1295号 2021.2.15

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次



専業ババ奮闘記(その2) 41

木幡智恵美

里帰り(2)

娘と宗矢が我が家に加わり、初めて迎えた朝は実歩の世界地図の後始末から始まつた。夜中に一度替えたパジャマと、朝方二つの布団をまたがつての大地図で、シート二枚に二着目のパジャマ。洗濯機二度目を回す。あとで気づいたことだが、私が朝ご飯の準備に降り、まだ眠つていた実歩を残して夫と寛大が降りた後、目が覚めた実歩は一人ぼっちだつたのだ。一人でトイレに行けなくて、その場で漏らしてしまつていたようだ。夫には、これから子どもたちが二人とも目覚めるまでは部屋にいてくれるようにと頼んだ。

義母をデイサービスに送り、寛大と実歩を保育所に送ると、今日からもう一つの大仕事加わる。宗矢の風呂だ。寛大は八月初め、実歩は五月末と、暖かい時季の出産だつた。今回が初めて寒い時季に産まれている。娘と相談し、暖めた台所で風呂に入れることにした。寛大の時に購入したビニール製のバスタブ(空気で膨らませるもの)が、あちこちビニールテープを貼つて補修を施しつつも使えそうなので、それを使つて。

ストープ二台で台所を暖め、ビニールシートの上にバスタブを置き、湯を張つていく。う、すでに空気が抜け始めている。事前に膨らませて確認してははずなのに。とにかく、もう宗矢は服を脱ぐ態勢に入つている。湯加減を娘に確かめてもらい、宗矢を裸にして、娘が片手で宗矢の耳を押さえながらも片方の手で体を支え、お尻から湯の中に浸していく。お尻に湯が触れるなり泣き出した。寛大は最初こそ泣いたが、徐々に気持ちよさそうな顔になつた。けれども、宗矢は湯に浸かっている間中泣いている。バスタブはどんどんしほみ、歪んだところから湯が漏れそうになるので形を整える。細心の注意を払いながらかけ湯をしたら、また火が付くように泣き出した。宗矢のことは娘に任せ、私は片付けにかかる。

台所の床はべちよべちよだ。萎びたバスタブから湯を救い出し、流しに捨てていく。少なくなつたところで、バスタブを抱えて流しに一気に捨てる。それから、水浸しになつたビニールシートをはぐり、床の濡れを拭きとる。はつ、やつと終わった。これを毎日続けるのか。とにかく、再度ビニールバスタブの補修点検だ。

30代フリーター やあ、ジイさん。選挙不正を理由にクーデターを起こしたミャンマーの国軍に世界中から非難が集まっている。

年金生活者 米大統領選で不正があったとして連邦議会になだれ込んだトランプ支持者らのもくろみをなぞつたような一面がこのクーデターにはある。連邦議会占拠事件を「米国大統領によって引き起こされたクーデター未遂だ」と指摘する歴史家もいた。選挙結果をくつがえすことができず「未遂」に終わったこの「クーデター」を、ミャンマー軍は「既遂」に転化してみせたかのようだ。

いつかは起きるクーデターだったかもしれないが、トランプやその支持者らの振る舞いがミャンマーの国軍をあつ押ししたことは十分に推測できる。このことはいま世界の民主主義に吹きつける逆風の強さを物語っている。

30代 独裁制から民主制に変わった韓国や台湾がこれまであと戻りすることなく進んできたのに、民政移管から10

成長だった。その競い合いの過程で、西側は東側の「平等」の理念を取り入れて福祉国家を目指し、東側は西側の「自由」を取り入れて経済の活性化をはかった。

経済成長が工業化による段階から、ソフト化による段階に移行し始めたとき、「自由」の欠如は足かせとなり、東側は敗北した。冷戦の終結は米ソによる世界支配の解体を意味し、両超大国によるイデオロギーの統制の解除でもあった。

それが現在のイデオロギー対立をアナーキーなものにした。同一次元で争うのではなく、それぞれが異なる次元に陣取って、異なる事実をもとに罵り合うようになった。それぞれの主張は冷戦時の東西の主張のような世界的な普遍性を持ち得なくなった。それが「陰謀論」を勢いづかせた。

30代 「分断」の克服を訴えて大統領になったバイデンにも決め手があるわけではない。

年金 バイデンは大統領就任演説で

年たつミャンマーはなぜ民主化に逆行する危機に見舞われたのか。

年金 数ある要因のひとつとして考えられるのは、アウンサンスーチーと与党NLDに対する国民の支持が数の上では圧倒的な広がりを持つものの、強さは必ずしも盤石ではなかったのではないかとということだ。ミンゾーウーというミャンマーの政治評論家は、国民の中にスーチー政権への不満がくすぶっているとして、その要因を次のように指摘していた。

「政府と国軍の関係がうまくいっていない。国内の少数民族と平和問題でも、軍事政権下につくられた憲法の改正問題でも、NLDは国軍の協力なしに進められない。だが、両者は距離を縮めずにお互いが言いたいことを言い合って解決は遠のいている。」(The Asahi Shinbun GLOBE + 2020年10月30日)

交渉ができないのは、スーチーに「正しいのは常に自分だ」と考えるエリートゆえの「唯我独尊」があるから

「私たちの民主主義を守る」と語った。そのため真つ先に実行に移したのは、民主主義をかたくなに拒む中国に対抗することだ。

彼はこの演説で「民主主義において何より得がたいもの、つまり結束が必要なのです」と訴えた。民主主義の掲げる「平等」を実現するには、全員が同じであると認めること、つまり皆がひとつになること、「結束」すること

ではないかと思わせる指摘だ。そうだとしたら、トランプが批判したワシントンのエスタブリッシュメントと似ていると言わなければならない。それが国民の堅固な支持を集められない要因となり、国軍はそのすきを狙いたという推測が成り立つ。トランプが民主党のエリートたちの政治から取り残された国民に不満が広がっているのを察知し、そのすきを狙って大統領の座を奪取したように。

30代 「分断」は世界に広がり、スーチーと国軍の間でも深まっていた。年金 現在のイデオロギー上の対立は、主張の違いを超えて、次元の違いに行き着いた。次元が違うから、事実もひとつではなく、それぞれの次元にそれぞれの事実が存在する。トランプ政権は「もうひとつの事実」を言い立てた。だから、「対立」ではなく「分断」という言葉が使われる。

東西冷戦下のイデオロギー上の対立は同一次元での対立だった。両陣営が目指したのはともに工業化による経済

が不可欠となる。それを手っ取り早く実現できるのが、自分たち以外の何者かへの対抗だ。

革命後のフランスは、干渉戦争を仕掛けた周辺諸国に対抗する「革命戦争」によつて「結束」を固めた。フランスの「平等」はそうした「排外主義」によつて確立された。エマニュエル・トッドはアメリカにおける民主主義の「排外性」を次のように語っている。「『米国の民主制』は、その始めから『人種感情』と結びついた『人種主義的民主制』でした。『黒人』や『先住民』の存在が、『(黒人や先住民ではない)白人の間での平等』を実現させてきたのです」(「それでも私はトランプ再選を望む」、『文藝春秋』2020年11月号)

「人種主義的民主制」が許されない現在、バイデンは「排外」の対象を他に求めるほかない。そして「分断」から「結束」に向かうにはなおさらトランプ政権に劣らぬ中国への強硬姿勢が必要となる。

ニュース日記 773
中村 礼治

トランプの残像が消えない